

焼津にて

一

て 津 焼

焼津といふこの古い漁師町は、輝かしい日の光を受けると、或る特殊な妙味を有つた間色かんじよくになる。——その——小さな入江に沿うて彎曲して——占めて居る荒れた灰色の海岸のその灰色を、丁度蜥蜴のやうに、この町は帯びるのである。この町は、大きな丸石で堅めた異常な壘壁ウレキによつて荒海に傷められぬやうに庇はれて居る。この壘壁は、海に面した方は、臺地テラスの段々の恰好に造られてゐて、それを構成して居る丸石は、深く地中に突き立ててある幾列もの棒杖の間に、編んだ竹籠細工のやうなもので、崩れ落ちぬやうされて居て、その棒杖がその段々を別々に支へて居るのである。この築造物の巔から陸の方を眺めると、——寺の庭の在り場を示す松の木立が此處其處にある、灰色瓦の屋根と雨風に曝されて灰色になつた家々の木材とが、一面に幅廣く延びて居る——焼津町全體がずらりと眸裏に収まる。海の方は、數湮の水面を越えて、巨大な紫水晶の塊のやう、地平線へくつきりと群れ集うて居る鋸の齒なす紺青の連峰が見え——其先きに、左手に、あらゆるものの上に巍然として屹立して居る壯麗な富士の靈峰が見えて——實に壯大な眺望である。防波壁と海との間には砂は少しも無い、——石の、主として圓い漂石の、灰色な傾斜面

があるだけである。それが大波と一緒に轉がるのであるから、風の強い日に岸打つ浪の横を通らうとするのは、厭いやな仕事である。一度石の浪に打たれると——自分は幾度もやられたが——其の経験は直ぐには忘れられぬ。

或る時刻に、幾列もの妙な恰好の船が——此地方に特有な形の漁船が——ごつごつな此の傾斜面の大部分を占める。それは——一艘四五十人は乗ることの出来る——非常に大きな船である。それは變な高い船首ふんしを有つてゐて、それへ佛教或は神道の護符（マモリ或はシユゴ）が普通貼り付けてある。神道の護符（シユゴ）の普通の形式のは、この目的の爲め、富士の女神の神社から供給されるものである。其の文句は斯うなつて居る。——フジサン、チャウジャウ、シンゲングウ、ダイギヨ、マンゾク。——それは、漁業好運の場合には、富士の頂上にその神社のある神様の爲めに非常な苦行をなすことを此船の持主は誓ふ、といふ意味である。

日本のうちで海岸のある國にはどの國にも——同じ國の漁村でも村が異ればその村々にすらも——その國或は村に特有な船と漁具との形式がある。實際、互に五六哩しか離れて居ない村で、數千哩距つて住まつて居る人種の發明かと思へる程に、型の異つた網や船を各々製造して居ることを時々認める。この驚くべき多種多様は、或る度までは、地方的傳統を重んずる念に——數百年の久しきが間祖先の教示と慣習とを改めずに保存する殊勝な保守主義に——基づいて居るのかも知れぬ。が然し、處を異にして住んで居る仲間のものが、種類の異つた漁獲を營んで居るといふ事

實に依つて、一層能く説明されるのである。だから何處でも或る一箇處で造る網なり船なりの形は、能く檢べて見ると、大抵は或る特殊の經驗によつての發明だといふ事が判かる。焼津の此の大きな船は此の事實の例證である。焼津の漁業は、日本帝國のあらゆる部分へ乾したカツヲ（英語のボイト）を供給するのであるが、その漁業の特殊の要求に應ずるやうにその船は工夫したもので、非常な荒海を乗り切ることの出来るやう造らなければならなかつたのである。それを海へ出したり海から引き上げたりするのは骨の折れる仕事である。が、村中が手傳ふ。傾斜地へ平たい木の枠を一線に置いて、瞬く間に、一種の斜路の即席製造をする。そしてその枠の上へ、底の扁平なその船を、長い綱で曳きずり上げたり下ろしたりする。ただの一艘をさういふ風に動かすのに、百人或は百人以上のものが——男、女、子供が、陰氣な妙な歌に合はせて、一緒に曳つばつて——働いて居るのが見られる。颱風がやつて來る時は、その船をずつと後ろへ、街路の處まで、上げる。そんな仕事を手傳ふのは中々面白い。手傳ふ者が他國のものであれば、漁師はその勞に酬ゆるにその海の不思議な産物を以てするであらう。驚く許りに長い足をした蟹だとか、途方も無く大きく腹を膨らまず風船魚だとか、手に觸はつて見なければ自然の物とは殆ど信じられぬやうな異常な恰好をした色んな他の動物だとか。

船首に神聖な文句を貼り附けて居るこの大きな船が、此濱での一番奇異な物といふのでは無い。竹を裂いて造つた餌籠がもつと異常なぐらゐである。高さ六呎、まはり十八呎、その圓頂閣の恰

好した頂に小さな穴が一つある籠である。乾かす爲めに防波壁に沿うて列べてあると、少し遠くから見ると、何かの住み家か小家かと間違へられさうである。それから、鋤のやうな恰好をして、金屬が打ち附けてある木製の大きな錨がある。爪の四つある鐵の錨がある。杭を打ち込むのに使ふ素敵に大きな槌がある。何の爲めに使ふのか想像も出来ない、まだまだ珍しい、他の色んな道具がある。見るもの悉くが何とも言へず古めかしく奇妙であるといふ事が、眼に見えて居る物が現實かどうかを疑はせる、彼の無氣味な遠隔といふ感じを——時間に於ても空間に於ても己は遙か遠く離れて居るといふ無氣味な感じを——起こす。それに焼津の生活がまた確に數世紀前の生活である。その人達がまた舊日本の人達で、子供のやうに——善良な子供のやうに——淡泊で親切で、過ぎると思ふ程正直で、後の世のことは思ひもせず、古昔からの因襲と古昔からの神々とに忠實である。

二

自分は偶々盆の即ち死者の祭日の三日間焼津に居た。だから三日目の最後の日の、美しいお訣れの儀式を見たいものと思つた。日本の多くの地方では、精靈にその航海用の極めて小さな舟を——帆船や漁船の小さな模型のもの、その一艘一艘に食物と水と焚いた香との御供物の入つて居るのを、その精靈舟を夜送り出す時は、小さな提燈か燈籠を添へて——提供する。ところが焼津

では燈籠だけ流すので、暗くなつたらそれを水へ下ろすと自分に話した。他の地方では夜中よなかが普通の時刻だから、焼津でも亦それがお訣れの時刻だと自分は想つた。そしてそれを見物に間に合ふやう眼を覺ます積りで、夕食後輕率にも自分はひとまどろみに耽つた。ところが自分が再び濱邊へ行つた十時までに、一切濟んで、誰れも彼れも家へ歸つてしまつてゐた。海を見ると、遠くに螢火の長い群のやうなものが——列を爲して海へ漂ひ出る燈籠が——見えた。が、もう餘程遠くへ流れ出てゐて、色のついた火の點々としか見えなかつた。自分は大いに失望した。また二度とは歸つて來ないかも知れぬ好機會をなまけて取り逃がしたやうな氣がした。——こんな古い盆の慣習は急速に失せつゝあるから。と思ふその次の瞬間に、思ひ切つて泳いで行けば十分その明かりの處へ行ける、といふ念が浮かんだ。燈籠はゆるやかに動いて居るのであつた。自分は衣物を濱へ脱いで飛び込んだ。海は穩かで、美しく燐光を放つてゐた。手足のひと漕ぎ毎に黄色な火の流れが燃えた。自分は迅く泳いだ、そして思つたよりも早くその燈籠艦隊の最後のものに追ひついた。自分はこの小さな船出の邪魔をするのは、即ちその靜かな進路を横へ外らすのは、不親切なことだらうと思つた。だから自分はそのうちの一つに近く身を置いて、その委曲を研究するに甘んじた。

構造は頗る單簡であつた。その底は眞四角な、縦横十吋位の、厚い板片であつた。その四隅に高さ十六吋許りのか細い棒が立つて居て、この眞つ直ぐに立つた四本が、十文字に組んだ板片で上の處で結び附けられて居て、紙貼りの四方を支へて居るのであつた。そして、長い釘がその底

の中心を通して上へ突き立ててあつて、その釘の尖さきに、點した蠟燭が挿し留めてあつた。上の方は明けつ放しである。四方は五色が——青、黄、赤、白、黒と——現はしてあつた。此五色は、形而上的に五佛と同一の佛教の五大を——空、風、火、水、地を——それぞれ象徴して居るのである。その紙壁の一方は赤、一方は青、一方は黄で、四番目の壁の右半分が黒く、左半分が、色無しで、白を表はして居るのであつた。この透かし明かりのどれにも戒名は書いて無かつた。内側にはちらちら光つて居る蠟燭があるだけであつた。

自分は夜を通して漂ひ行く、しかも漂ひ行くにつれて風と波との衝動のもとに次第に遠く離れ、ばなれに散らばつて行く、この明かるい脆い恰好したものをちつと見て居つた。その各々が、色のをのゝきをさせて、物に怯ちて居る或る生物のやうに——そのまた外の暗黒の中へそれを運んで行く盲目の流れに戦慄して居る生物のやうに——思はれた。……我々自らも、より深い且つより、ほのぐらい海へ船下ろしされて、避く可からざる分解へと漂ひ行くにつれて、始終互々に次第に遠く遠く、離れ行く燈籠の如き身では無いのか。間も無く銘々の思想の光は燃え盡きる。するとその憐れな肉體や、昔ては美しい色であつたものの残つて居る總ては、永久に色無き『空』へ溶けこまねばならぬのである。……

斯く考へるその刹那にすら、自分は眞實此處に一人きりで居るのか知らと疑ひ始め——自分の横で波に揺られて居る物のうちに、光りの唯だのをのゝき以上の或る物が居はせぬか知ら、消え

行くその炎を惱まし、それを見て居る者を見て居る或る者が居はせぬか知ら、と考へ始めた。微かな冷たいをのゝきが自分の身體中をすうつと通つた——恐らくは水の深みから昇り来る或る冷たさであつたらう——或は恐らくは或る靈的な空想が潛行しただけのことであつたらう。と、此海岸地方の古い迷信が——『精靈』が旅をする折は危険だといふ古い漠とした警戒が——自分の心へ浮かんて来た。夜間斯うして此海へ出て居る自分の身へ——『死者』の光明を妨害して居る、或は妨害して居るやうに思へる自分の身へ——何か禍が落ちて來でもすれば、自分は今後の或る無氣味な物語の主題となることであらう、と想つた。……そこで自分は佛式の訣れの文言を囁いた——その光りに。——そして急いで岸を指して泳いだ。

足が石へ再び觸はると、前の方に白い影が二つ見えたので自分はびつくりした。が、水は冷たいかと尋ねるやさしい聲が自分を安心させた。それはその妻と一緒に自分を探しに來た、自分の宿の老主人の、魚賣りの乙吉の聲であつた。

『氣持ちのいい程冷たいだけだ』自分は二人と一緒に歸宅しようとして着物をひっかけながら答へた。

『あゝ、盆の晩に海へ出るの宜う御座いません』と乙吉の妻は言ふ。

『遠方へは行かなかつたよ。ただ燈籠が見て見たかつたのだ』と自分は答へる。

乙吉はかう抗辯するのであつた。『河童だつて時々水で死にます。此村の者で、乗つて居た船が破れてから、非道い天氣の日に、七里泳いで戻つた者がありました。だがあとで水へはまつて

『カツバモオボレシヌ』とは普通の諺である。カツバといふは水に、殊に川に、住む怪物である。

死にました』

七里と云へば十八哩少し足らずである。此村で今どき若い者でその位泳げる者が居るかとは自分は訊ねた。

老人は答へて曰ふに『多分ありませう。強い泳ぎ手は多勢居ります。此處の者は皆んな泳ぎます。——小さな子供でも。だが漁師がそんな長い間泳ぐのは、生命を助からうとする時だけです』

『また戀をする時に』と、その妻が言ひ添へた。『羽島^{はじま}娘のやうに』

小泉 『誰れがだつて』と自分は問うた。

『さる漁師の娘でありました』と乙吉は言ふ。『七里離れた網代^{あじろ}に戀人が居りました。それで、夜その男の處へ泳いで行つては、朝泳いで歸りました。男はその女の道しるべに明かりを燃やして置くのでありました。ところが或る闇の夜にその明かりを不精して燃やしませんでした——それとも風で消えたのでしたか。その娘は道に迷つて死んでしまひました。……これは伊豆で名高い話であります』

——『それでは、極東では、可哀想に、泳ぐのはへ口である。そして、斯んな事情の下に在つて、レアンター譯者註一に對する西洋の評價は何であつたであらうか』斯う自分は心で思つた。

三

いつも盆時代には海が荒れる。だからその翌朝浪が段々高まるのを見ても自分は驚きはしなかつた。一日中高まつた。午後の中頃までには波は非常なものとなつた。で、自分は防波壁の上に坐つて、日暮までそれを見て居つた。

それは長い、ゆるやかな——巨大なそして恐ろしい——うねりであつた。時折、それが碎けるついに前に、聳え立つ大浪が、丁度、慄へる硝子の音のやうなチリンといふ音を立ててその縁の長さ全體に縛を入れる。それから自分の足の下の壁を震はす程の轟とどろきを以て落ちて平らになる。……自分は、その軍隊を海の如くに——劍戟の波の上に波を以てし——萬雷に次ぐに萬雷を以てして

——襲撃させた今は亡き露西亞の偉大な將軍譯者註二のことを考へた。……まだ殆ど風といふ程の風は無かつた。が、何處かほかで天氣が荒れて居つたに相違無い。で、岸打つ大浪はずんずん高まりつつあつた。自分はその浪の運動に心を奪はれた。斯んな運動は筆舌の及ばぬ許りにどんなに複雑なものであり——しかも、永遠にどんなに新しいものであることか！ その運動の五分間すら誰れが完全に記述することが出来よう。正しく同じに碎ける二つの波を見た人間は未だ嘗て一人も

無い。

そしてまた恐らくどんな人間でも、捲き返す海の大波を眼に見、その雷なす音を耳にして、眞面目な氣持ちにならぬ者は未だ嘗つて無いであらう。動物——牛や馬——でも、海の前では默想的になることを自分は氣附いて居る。彼等はその洪大な物の姿と音とが此世の他の凡てを忘れしめたかのやうに、ちつと立つて、一と所を見つめて、そして耳をすまして居るのである。

此處の海岸に或る民間俚諺がある。それは『海には魂があり耳がある』といふのである。そしてその意味は斯う説明される。海をこほ恐いと思ふ時、その恐いといふ念を口に出してはならぬ。恐いといふ事を言ふと、浪は突然高くなる。……さて此の想像は自分には徹頭徹尾自然のやうに思はれる。海へ入つて居るか、船で海へ出て居るかする時、海は生きては居ない——海は意識のある、そして我々に敵意のある力を有つては居ない——とは充分に信ずる事が自分には出来かねる、と自白せざるを得ぬ。理性は、その當座は、此の空想に對して何の役にも立たぬ。海といふものはただ水が集まつて成つて居るに過ぎぬと、斯う考へることが出来るやうになるには、その非常に大きな浪が、小さな漣が鈍く這うて居るとしか見えぬやうな、どつか高い處に自分は居なければならぬのである。

然し此原始的な空想は晝の明かるい時よりか夜の暗闇の時の方がもつと強い位に起り得るのである。燐光の夜、汐の光りが潜んだり閃いたりするのが、如何に生きて居るやうに見えること

か！ その冷たい炎の色合が微妙に移り變はるのが、如何に爬蝨的であるか！ 斯んな夜の海にもぐりこんで、その青黒い暗がりの中で兩眼を開いて、そして眼の運動に伴なふ明かりの無氣味な迸出を心留めて見て見よ。水を透して見る光つた點が一々みな、眼を開いたり閉ちたり！ するやうである。そんな瞬間には、何か奇怪な有情に包まれて居るやうな——そのどの部分も同じやうに觸官を有ち視官を有ち意志を有つて居る、或る生きた物質のうちに、無限無窮の軟らかい冷たい『靈』のうちに、吊り下げられて居るやうな——氣が誰れしも實際するのである。

四

その晩自分は長い間床で眼を覺まして居て、その偉大な汐の雷と轟き碎ける音に耳を澄まして居た。その分明にきこえる衝撃の音よりも深く、またより近い浪の突撃の音よりも深く、はるか遠い大波のベエスの音がきこえるのであつた。それは自分の家がそれに震へる程の、絶え間無い底知れずの囁き聲で、——想像には、無限の騎兵隊の馬蹄の響のやうに、無數の砲車の集中する響のやうに、日の出からして世界程の幅の大軍隊が突進するやうに、きこえる音であつた。

すると自分は、子供の折に、海の聲を聴いた時の漠たる恐怖の念について考へて居つた。——そして、後年、世界の種々な地方での種々な海岸で、磯打つ浪の音がいつもその子供らしい感情を復活したことを懐ひ出した。確に此の感情は、幾千萬世紀も自分よりか古いもので——祖先の

然し海の聲よりもつと深く、しかもつと妙な具合に、我々の心を動かす音が——時々我々を眞面目にならせる、しかも頗る眞面目にならせる者が——ある。音楽の音である。

大音楽は、我々心裡の過去の神祕を想像も及ばぬ許り深く攪亂する、心靈の一暴風である。大音楽は——その異つた樂器と聲との各々が、各々異つた幾萬億の生誕前の記憶に別々に訴へる所の——一種絶大な魔法である、とも或は言へよう。青春と哀憐とのあらゆる精靈を呼び起こす音色がある。死んだ熱情のあらゆる幻の苦痛を喚起する音色がある。莊嚴と威力と光榮との死んで居る感情總てを——滅めつしてしまつて居るあらゆる大歡喜を——忘れられて居るあらゆる慈悲寛容を——復活する音色があるのである。まことや音楽の力は、自分の生命は百年に足らぬ前に始まつたのだ！ と愚かにも夢想して居る人間には、不可解に思へることであらう。然しながら、『我』の本體は太陽よりも古いものであると知つて居る人にはどんな人にも、この神祕は判明するのである。その人は、音楽は一種の魔法だといふことを知るのである。その人は、旋律メロディのありとあらゆる漣に對して、諧調ハーモニーのありとあらゆる巨浪に對して、千古の快樂と苦痛との無限の或る渦卷が、『生死の大海』から、その心裡で應答するのであると悟るのである。

快樂と苦痛、此二者は大音楽には常に混合して居る。だからこそ音楽は海洋の聲、或は他のどんな聲もが爲し得ないほど、深く深く我々に感動を與へ得るのである。が然し、音楽のより大なる發言に在つては、低音調を成して居るものは常にこの悲哀である——『靈の海』の波の嘯き聲である。……音楽といふ念が人間なるものの頭腦に開展し來り得る迄に經驗されたに相違ない所

シルもオギツドも語つて居るが、シルレルの物語唄バラッドとグリルパルツェルの戯曲とで最も能く近代の人に知られて居る。

譯者註二 偉大な將軍といふはミカイル・スコベレフ（一八四四—一八八二）を指す。
譯者註三 『詩篇』第四十二篇の七に『なんちの大瀑のひゞきによりて淵々よびこたへ、なんちの波なんちの猛浪ことごとくわが上をこえゆけり』とあり。（大谷正信）

At Yaidan. (In Ghostly Japan.)